新規採用生薬

1999.6.21

半枝連

シソ科の Scutellaria barbata D. Don の全草を乾燥したもの
薬味・薬性：辛・平（寒）
用途：解熱、解毒、鎮静、止血、抗炎症薬として、打ち身、外傷、肝炎、肝硬変、癌腫、吐血、諸出血などに民間的に用いている。

生地黄

ゴマノハクザ科の Rehmannia glutinosa (Gaerth.) Libosch.（カイケイジオウ）の塊状根を乾燥したもの
薬味・薬性：甘・苦・寒
用途：熱性疾患、血熱による出血、陰虚内熱、蕁麻疹・湿疹などの血熱による皮膚病などに用いる。

参考資料：

原色和漢薬図鑑　難波恒雄　保育社
漢薬の臨床応用　神戸中医学研究会　医歯薬出版株式会社

9—6～8 地黄（じおう）REHMANNIAE RADIX

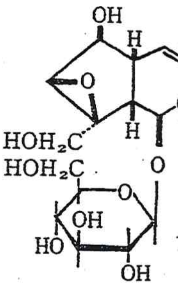
（6.熟地黄 7,8.乾地黄）

『神農本草経』の上品に「乾地黄」の名で収載され，古来から補血，強壮の要薬とされている。別名を「苄」,「芑」,「地髄」などという。『爾雅』に「苄は地黄なり」とあって，郭璞は注して「江東では苄と呼ぶ」といい，羅願は「苄は沈下するものが珍品であって価も高い。故に文字は下に従うのだ」といっている。『日華子諸家本草』には「生のものを水に浸して試験をするに，浮くものは天黄と名付け，半ば浮き半ば沈むものは人黄と名付け，沈むものは地黄と名付ける。薬力は沈むものが佳く，半ば沈むものは次品で，浮くものは劣品である」とあり，『名医別録』には「咸陽（陝西省咸陽県の東）の川沢に生ずる。土地の黄なる処のものが佳い」とある。現在市場には乾地黄，熟地黄の別があり，その他，中国では生地黄（鮮地黄，なまの根）も用いており，これらは調製法の違いによるもので基源は同一である。しかし薬効には差異があるといわれている。

〔基源〕中国産はゴマノハグサ科 (Scrophulariaceae) の *Rehmannia glutinosa* (Gaertn.) Libosch. var. *hueichingensis* Chao et Schih (=*R. glutinosa* Lib. forma *hueichingensis* Hsiao) の肥大根をそのまま(乾地黄)，または蒸して(熟地黄) 乾燥したもの。このものは華北地区に自生する *R. glutinosa* Lib. の栽培種であり，河南省懐慶に主産するので「懐慶地黄」と称される。北朝鮮，韓国，日本産はアカヤジオウ *R. glutinosa* Lib. var. *purpurea* Makino の根である。広西省ではキク科 (Compositae) の *Gynura divaricata* DC. の根を「生地」または「土生地」と称し，また浙江省ではキク科 (Compositae) のキクイモ *Helianthus thberosus* L. の根を「熟地黄」と称している。ともに偽品である。

〔産地〕中国（河南省，浙江省で栽培，その他河北，陝西，甘粛，湖南，湖北，四川，山西省に産する)。朝鮮半島。

〔成分〕sitosterol, D-mannitol などが知られている。その他 iridoid 配糖体の catalpol。



catalpol

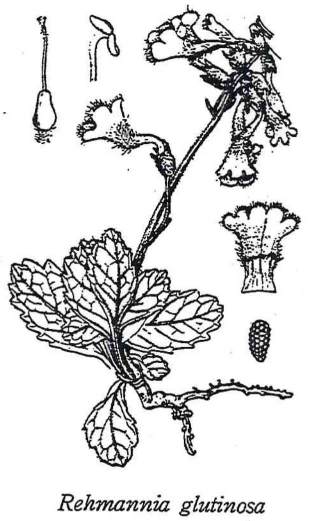
〔薬理作用〕地黄の水製エキスおよびエタノールエキスを家兎に経口投与すると血糖降下作用がみられる。さらにメタノールエキスの一分画にアロキサン糖尿マウスに対する血糖降下作用も認められている。catalpol はマウスに対し遅効性の緩和な瀉下作用および利尿作用がある。

〔薬味，薬性〕乾地黄：甘。寒。熟地黄：甘。微温。生地黄(鮮地黄)：大寒。

〔薬能〕地黄は臨床応用上，乾地黄，熟地黄，鮮地黄(鮮生地)の3種があり，それぞれ性味，効能が異なっている。乾地黄は滋養陰血に用い，腎水真陰の不足を補い，少陰の血虚，火旺を治し，補腎，益陰の要薬である。ゆえに，涼血，補血に効があり，腎虧陰虚，虚労内損，吐血崩漏，心煩不安などの諸症に運用される。ただその性が寒で，質が粘質であるので，陽虚陰盛，脾胃虚寒には用いてはいけない。現に用いる場合乾のままと，炒るときがある。乾は滋養の力が強く，炒は止血の効が勝るといわれている。熟地黄は生地黄を蒸制したものでその性質が変化しており，補血滋陰の力が強く，腎水乾涸，陰血衰竭の症に最も良い。六味丸，四物湯にはこれを用いる。

〔用途〕補血，強壮，解熱薬として，貧血，吐血および虚弱症などに応用する。

〔処方例〕炙甘草湯 (126)，芎帰膠艾湯 (53)，八味丸 (238)，六味地黄丸 (300)，固本丸（張氏医通：生地，熟地，天冬，麦冬，人参)。



Rehmannia glutinosa
地黄（p.64）

2 生地黄（しょうじおう）

処方名　生地・生地黄・乾地黄・地黄.

基　原　ゴマノハグサ科 Scrophulariaceae　地黄 *Rehmannia glutinosa* (Gaertn.) Libosch.（カイケイジオウ）の塊状根を乾燥したもの（蒸したり煮たりしていないもの）. 新鮮なものを鮮地黄という.

性　味　味は甘・苦, 性は寒.（帰経：心・肝・腎経）.

主成分　rehmannin・xylitol・glucose・mannitol・鉄分・ビタミンＡ類.

薬理作用　清熱涼血・生津.

（1）止血：動物実験によると抽出物は血液凝固を促進する[28]. これは中医学で止血の方剤に生地黄を使用していることの根拠を示すものである.

（2）強心・利尿：衰弱した心臓に対する強心作用は顕著で, 主として心筋に作用する[29]. 強心・利尿作用によって解熱を補助する.

（3）血糖降下：あきらかな作用があり, 実験的な高血糖を抑制し, 正常な家兎の血糖も下降する[30,31].

臨床応用

（1）熱性疾患に用いる. 舌質深紅・口乾・便秘・睡眠不安などの脱水症状があるときには, 玄参・麦門冬などを配合して, たとえば増液湯を用いる. 増液とは, 実際に体液を増加するのではなく, 清熱することによって水分の消耗をへらすにすぎない. このことを, 熱源を除去することによって水分の蒸発が自然に減少するという意味で, 釜底抽薪（かまどの薪をひきぬく）とたとえている.

（2）血熱による出血に用いる. 吐血・鼻出血には茅根・芦根を, 血尿には木通・車前子を配合する. 痔出血には槐角・地楡を配合して, たとえば涼血地黄湯を用いる. 陽虚・気虚による出血, あるいは出血によって陽虚・気虚を生じたときには, 生地黄を使用してはならない.

（3）陰虚内熱に用いる. 滋陰清熱の方剤には生地黄を欠かしてはならない. 一般に鼈甲・地骨皮・知母などを配合する. 慢性咽喉炎などの陰虚による咽喉痛には, 甘草・薄荷・山豆根などを配合する. 陰虚火旺による大便硬・習慣性便秘には, 生地黄60ｇを煎じて服用するか, 豚肉（赤身）60～120ｇと煮たスープを服用する.

（4）蕁麻疹・湿疹などの血熱による皮膚病に, 白蒺藜・白蘚皮・防風などを配合し, たとえば生地消風飲を用いる. 毎日, 生地黄90ｇを300ml になるまで煎じつめ, 1～2回に分けて服用するのもよい[32]. 血熱による癤などの化膿症には, 生地黄30ｇ・夏枯草15ｇを煎じて服用する.

（5）糖尿病には, 天門冬・枸杞子などを配合したものを基本にして, 症状により加減して用いる.

（6）急性関節リウマチ・慢性関節リウマチの急性期には, 毎日, 生地黄90ｇに600～800ml の水を加えて1時間煎じ, 薬液300ml を1～2回に分けて服用する. 疼痛・腫脹を軽減する[33].

使用上の注意

（1）生地黄は涼性であるから清熱涼血に, 熟地黄は温性であるから補血滋陰に適している. それゆえ, 虚寒には熟地黄を用いて生地黄は使用せず, 熱証には生地黄を用いて熟地黄は用いない. 清熱と補虚を同時に行なう必要があるときには, 生地黄と熟地黄を一緒に使用する. たとえば百合固金湯（肺結核の喀血に使用する）・当帰六黄湯（滋陰清熱・固表止汗の効能があるので, 熱感・盗汗・唇がかわくなどの陰虚の症状に用いる）などはこの配合による方剤である.

（2）生地黄はしつこくて消化されにくいので, 多量に服用すると消化機能が障害される. これを防ぐには, 枳殻か縮砂を少々加える必要がある. 下痢・腹痛・悪心などの症状が生じたときには, 間隔をあけて服用するとよい.

（3）気血両虚の妊婦・脾胃気虚で泥状便のものには用いてはならない.

用　量　10～30ｇ.

方剤例

（1）増液湯（《温病条辨》）：生地黄24ｇ　玄参30ｇ　麦門冬24ｇ　水煎服.

（2）凉血地黄湯（《外科大成》）：生地黄18ｇ　当帰９ｇ　赤芍９ｇ　黄連３ｇ　枳殻３ｇ　黄芩５ｇ　槐角９ｇ　地楡12ｇ　荊芥６ｇ　升麻３ｇ　天花粉12ｇ　生甘草３ｇ　水煎服.

（3）生地消風飲※：生地黄12ｇ　川芎３ｇ　大風艾９ｇ　白蘚皮12ｇ　白蒺藜12ｇ　防風９ｇ　水煎服.

（4）百合固金湯（《医方集解》）：生地黄９ｇ　熟地黄９ｇ　玄参15ｇ　麦門冬９ｇ　当帰９ｇ　白芍９ｇ　川貝母９ｇ　桔梗６ｇ　百合24ｇ　甘草６ｇ　水煎服.

（5）当帰六黄湯（《蘭室秘蔵》）：生地黄15ｇ　熟地黄15ｇ　黄連６ｇ　黄芩９ｇ　黄柏６ｇ　黄耆18ｇ　当帰６ｇ　水煎服.

1 熟地黄（じゅくじおう）

処方名 熟地・熟地黄.

基 原 ゴマノハグサ科 Scrophulariaceae 地黄 *Rehmannia glutinosa* Libosch. f. *hueichingensis* (Chao et Schih) Hsiao（カイケイジオウ）の根茎を乾燥し，酒を加えて蒸したのちに日干しする過程をくり返してつくったもの.

性 味 味は甘，性は微温.（帰経：心・肝・腎経）.

主成分 rehmanin・mannitol・ビタミンA類物質.

薬理作用 滋陰・補血.

あまり詳しく研究されていないが，滋養・強壮・血糖降下のほかに，強心・利尿・抗アナフィラキシーなど生地黄と同様の作用があるようである.

臨床応用 補血滋陰の常用薬である.

（1）血虚に用いる．貧血その他の主として血虚の症状をあらわす疾患に，当帰・白芍などを配合して使用する．方剤はたとえば四物湯で，補血の主方である．血瘀に使用するときには，川芎の量を増やす必要がある．四物湯は慢性病に対する理血の方剤として婦人科でもっともよく用いるが，急性出血に対する使用価値はない．四物湯と四君子湯を合わせた八珍湯は，気血両虚に用いるものである．このほか四物湯は，動悸・不眠には党参・酸棗仁・茯苓などを，月経不順には当帰・白芍・川芎・香附子などを，不正性器出血には阿膠・当帰・白芍などを配合して使用する.

（2）陰虚に使用する．多くの慢性病で，主として陰虚の症状があらわれたときに使用する．体が衰弱して熱感・盗汗・腰膝部がだるく無力・咽喉乾燥・口渇・舌先が紅い・脈細数などの陰虚の症状があるときは，必ず熟地黄を使用し，山茱萸を配合して肝腎を補益し，茯苓・山薬で健脾利湿し，牡丹皮で涼血清熱し，沢瀉で利水するのがよい．これが六味地黄丸（湯）で，陰虚に対する基本方として陰虚の症状がある多くの慢性病に有効である．陰虚型の慢性腎炎・高血圧・糖尿病・神経衰弱などに，六味地黄湯を基礎に症状に応じた加減を行えば効果がある．動物実験によると，六味地黄湯は腎性高血圧に対し血圧降下・腎機能改善の効果がある.

（3）陰虚の咳嗽・喘息に用いる．古人は経験的に“熟地黄は虚喘を治す良薬である”と述べている．熟地黄の煎湯を毎日茶の代りに服用するとよい．牛膝・肉桂を配合すると息苦しさ・呼吸困難などの肺気上逆が楽になる．六味地黄丸加五味子（これを都気丸という）を使用してもよい．肺腎陰虚で，痰が多い・咳嗽・息苦しいなどの症状があるときは，陳皮・半夏・茯苓を配合して，たとえば金水六君煎（熟地二陳湯）を使用する.

このほか，陰虚腸燥*による習慣性便秘（虚秘）には，熟地黄 30 g と豚肉（赤身）を煮たスープを服用するとよい.

浮腫に熟地黄を用いるかどうかは，弁証によって決めるべきである．臨床上は熟地黄を使用すると浮腫が増悪するようであるが，陰虚のときには使用してもよい.

使用上の注意

（1）熟地黄は甘味があってしつこいので，長期間服用すると消化機能が障害され，腹が脹る・下痢・胃部不快感などの副作用が生じることがある．縮砂を加えるか，間歇的に服用すると副作用が減る.

（2）感冒・消化不良・脾胃虚寒・下痢のときには使用すべきでない．肝火上炎の高血圧症には使用しない．急性気管支炎で，喀血・黄痰・粘痰・口乾・胸痛・舌質が紅・舌苔が黄色いなどの痰火の症状をともなうときにも使用すべきでない．（すなわち外感・実熱・虚寒には使用しない）.

（3）熟地黄と何首烏は効能が似ており，どちらも補陰するが，熟地黄の方が補益力が強い．一般に，補肝の方剤には何首烏を使用し，効果がないときに熟地黄を用いる.

（4）熟地黄を酒につけると，補血と同時に活血の効果も生じる.

---

* 消化管の組織液・分泌液の不足.

用　量　12～30ｇ．多ければ毎日45～60ｇ，最高90ｇまで使用する．

方剤例

（１）四物湯（《局方》）：熟地黄12ｇ　当帰12ｇ　白芍９ｇ　川芎５ｇ　水煎服．補血の力を増強するときは熟地黄・当帰を増量し，活血の効能を強めるときには当帰・川芎を増量する．

（２）六味地黄丸（湯）（《小児薬証直訣》）：成薬．熟地黄・山茱萸・山薬・茯苓・沢瀉・牡丹皮．１日１～２回９ｇずつ服用する．

（３）都気丸（《医宗已任編》）：六味地黄丸加五味子．１回６～９ｇを，単独であるいは他の湯剤に入れて服用する．

（４）金水六君煎（熟地二陳湯）（《景岳全書》）：当帰９ｇ　熟地黄12ｇ　陳皮５ｇ　半夏６ｇ　茯苓９ｇ　炙甘草３ｇ　水煎服．

（５）八珍湯（《正体類要》）：党参12ｇ　白朮６ｇ　茯苓９ｇ　炙甘草３ｇ　熟地黄12ｇ　当帰９ｇ　川芎６ｇ　白芍９ｇ　生姜２ｇ　大棗５ｇ　水煎服．

49—8 半枝蓮（はんしれん）SCUTELLARIAE HERBA

半枝蓮の名は歴代本草にみられず，中国江蘇省周辺地区の民間薬である。1956年に出版された周太炎，丁志遵著の『南京民間薬草』に「通経草，紫連草，並頭草」などの生薬名で収載されている生薬が，現市場の半枝蓮とよく合致する。基源植物はシソ科 (Labiatae) の *Scutellaria rivularis* Wall. としているが，このものは *Scutellaria barbata* D. Don と同一種である。ところで半枝蓮という名称は，蘇州や鎮江の土名であって，1959年出版の『江蘇省植物薬材誌』に初見する。別名を牙刷草(蘇州)，田茎草(宜興)といい，「民間で全草を煎服して，婦人病の治療薬とする。益母草の代用として非常に良い療効がある」とその効能を述べている。このものは地方によって多くの名があり，『広西薬用植物図志』には「小韓信草，水韓信」，『浙江民間常用草葯』には「野夏枯草，方草児，半向花，半面花，偏頭草，四方草」，『広西中草葯』には「耳挖草」，『福建中草葯』には「小号向天盞，虎咬紅，再生草」などで，華中～華南の民間薬草である。『広州植物誌』には *Scutellaria* 属として *S. indica* L.（韓信草，別名：耳挖草，大力草），*S. barbata* D. Don（狭葉韓信草）の2種をあげ，前者のタツナミソウ *S. indica* L. の効用を『嶺南採薬録』を引用して「味辛，性平。跌打傷を治し，風を祛り，筋骨を壮んにし，蛇傷を治し，血を散じ，腫を消す。酒に浸して用いる」と誌しているが，後者の *S. barbata* D. Don 効用は記していない。

〔基源〕シソ科 (Labiatae) の *Scutellaria barbata* D. Don (＝*S. rivularis* Wall.) の全草を乾燥したもの。

〔産地〕中国（江蘇，江西，福建，広東，広西省など）。

〔成分〕フラボン類，ステロール類を含むとされているが，詳細は不明。

〔薬理作用〕半枝蓮の水エキスは，ミューラー試験管法においては，急性顆粒型白血病の白血病細胞をやや抑制するが，細胞呼吸器法の実験によると，白血病細胞の抑制率は75％以上であった。

〔薬味，薬性〕辛。平（寒）。

〔薬能〕半枝蓮は，瘀血を散じ，血を止め，痛みを止め，炎症を消し，水を利し，経を通じる作用があり，打撲傷，瘡癰，蛇咬傷，吐血，血淋，衄血，赤痢，黄疸，瘰癧，咽喉疼痛，癌腫などの治療に用いる。肺癰には魚腥草などと共に用い，肺癌には蜀羊泉，尋骨風，魚腥草などを配合し，胃，腸癌には白花蛇舌草，石見穿，八月扎，半辺蓮などを配合して用いる。

〔用途〕解熱，解毒，鎮痛，止血，抗炎症薬として，打ち身，外傷，肝炎，肝硬変症，癌腫，衄血，諸出血などに民間的に用いている。

Scutellaria barbata
半枝蓮（p.71）